

学 位 論 文 要 旨

研究題目

注意欠如・多動症 (ADHD) の併存あるいは特性が、成人強迫症患者の臨床像に及ぼす影響の横断的検討

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻

高次神経制御系

神経精神医学 (指導教授 松永 寿人)

氏 名 宮内 雅弘

不安症、あるいは強迫症 (obsessive compulsive disorder: OCD) では様々な精神疾患の併存がみられる。児童期の不安症あるいは OCD 患者では、不注意、多動性、衝動性を中核症状とする注意欠如・多動症(Attention Deficit/Hyperactivity Disorder: ADHD)の併存が高率にみられる。ADHD は年齢とともに ADHD 症状が軽減し、特に半数近くが成人期以降は診断基準から外れるものの、閾値以下の ADHD 症状を成人期以降も有している割合が多いとされている。診断閾値を満たさない ADHD 傾向が成人期以降も残存し、患者の精神病理や治療に影響を与えることが予想される。したがって、OCD 患者においても、診断閾値を満たすものから、閾値下の傾向に留まるものまで ADHD の精神病理に連続性があり、これを念頭に臨床的な評価や治療を行うことは有用と考えられる。しかしながら、ADHD の診断閾値下傾向の把握に関して、その方法の標準化はなされておらず、またそのような一群の臨床像について、少なくとも OCD 患者を対象とした研究は未だ行われていない。

本研究は成人 OCD 患者を対象に、ADHD の併存を評価した。さらに ADHD の診断域には該当しないが、ADHD の重症度評価スケールである日本語版コナーズ成人 ADHD 評価スケール通常版 (Conners' Adult ADHD Rating Scales : J-CAARS) CAARS の下位項目である ADHD 指標が閾値を超えていた一群を ADHD 特性群として、ADHD 併存群、ADHD 特性群、OCD 単独群の 3 群間に群別を行った。全対象者に、各患者の背景や OCD の臨床的特徴、経過を調査するとともに、うつ病や自閉症スペクトラム障害、不安障害などの精神疾患の併存についての評価を行った。強迫性症状の内容や重症度については Yale-Brown Obsessive-Compulsive Scale (Y-BOCS ; 強迫症状重症度評価尺度)を用い、自記式質問紙として、調査時の quality of life (QOL)を反映する日本語版 WHO-QOL-26、衝動性の程度を測定する Barratt Impulsiveness Scale (BIS)-11、自閉スペクトラム症の評価を行う Autism Spectrum Quotient (AQ)、そして抑うつ症状や不安症状には、それぞれ Zung's Self-rating Depression Scale (SDS)と State-Trait Anxiety Inventory (STAI)などを施行した各臨床的指標を比較した。

結果、ADHD 併存群は、他群に比し、OCD が早発で、衝動性が高度であり、機能水準が低く、うつ病や物質・行動嗜癖症などの併存が高率であった。一方 ADHD 特性群では、CAARS の各下位項目に加え、これらが併存群と同程度、あるいは併存群と単独群との中間に位置し、ADHD の閾値下特性も OCD 患者の臨床像に多角的に影響する可能性が示唆された。